

私の履歴書

前橋 汀子

⑤

小学3年のとき東京学芸大付属大泉小学校に転校することになった。大泉は同じ区内とはいえ、練馬区桜台の家からは距離があり、都心の飯田橋にあった小野アンナ先生の家はさらに遠くなる。

父は娘の学業とバイオリンの両立を考え、大泉への引っ越しを決断した。西武池袋線大泉学園駅の周辺は、1952年当時は見渡す限りの畑で、新居の周りも家はまばらだった。家までの道案内は「キャベツ畑の角を左に曲がって、ニンジン畑を右に見ながら真っすぐね」といった調子だ。おかげで心置きなくバイオリンの音を出すことができた。

学校からレッスンに直行

楽譜に残る母の書き込み

父は娘の学業とバイオリンの両立を考え、大泉への引っ越しを決断した。西武池袋線大泉学園駅の周辺は、1952年当時は見渡す限りの畑で、新居の周りも家はまばらだった。家までの道案内は「キャベツ畑の角を左に曲がって、ニンジン畑を右に見ながら真っすぐね」といった調子だ。おかげで心置きなくバイオリンの音を出すことができた。

大泉の家では動物をたくさん飼っていた。ドドちゃん、レレちゃん、ミミちゃんと階名にちなんで名づけた猫が7匹。ニワトリ、ウサギ、コリ

片づけるのだった。

白衣の傷痍軍人が募金箱を持って電車に乗ってくる姿を何度も目にした。まだ世の中が戦後の混乱から抜け出せずにいる中で、私はバイオリンのおけいこに通っていたのだ。客観的に見れば、お気楽なお嬢ちゃんかもしれないが、私は私なりに必死だった。アンナ先生のレッスンは厳

家の曲が多かったからだ。

母はおたまじゃくしを一つ根気よく書き写した。しかも全く同じ楽譜を2枚作っている。1枚は私のため、もう1枚は先生の指導をメモする母の手控え用だ。音符の横



食卓を囲んで（左から母、筆者、妹、父）

に鉛筆で「かるく」などと記した譜面も残っている。

母は専業主婦だが、とても器用な人で、レストランのような食事を作り、洋裁の腕も玄人はだしだった。私と妹の着る服は、いつも母がおそろいで作ってくれていた。

母は洋裁の頼まれ仕事を請

け負い、少しでも家計の足しになればと奮闘していた。私がバイオリンの練習をしていると、隣の部屋からミシンを踏む音が聞こえた。私も女の子だから洋裁や料理のお手伝いをしてみたい。ところが母は「そんな暇があったらバイオリンのおさらいをしろ」ときっぱり言い放つのがだった。

母はバイオリンに関してひたすら情熱を注ぎ込んでいき、私はそんな母が怖くなっていった。子供にとって1日に何時間もの練習はさすがにつらすぎる。離れにあった祖母の部屋に逃げ込んだことも一度や二度ではない。

「そんなに嫌ならやめてしまいなさい」。母が楽器を庭に放り投げたことがある。私は「ああ、これで練習しなくてすむわ」と独りホッとしたのだった。（バイオリンリスト）